

浜通り環境放射線研修会 双葉C班

岩間 柚羽 恒松 大智 畑 杏花理 和田 隼輝
河村 侑哉 箕輪はるか



大阪大学
THE UNIVERSITY OF OSAKA

サンプリング計画



サンプリング計画

植物



ミゾソバ

土壌

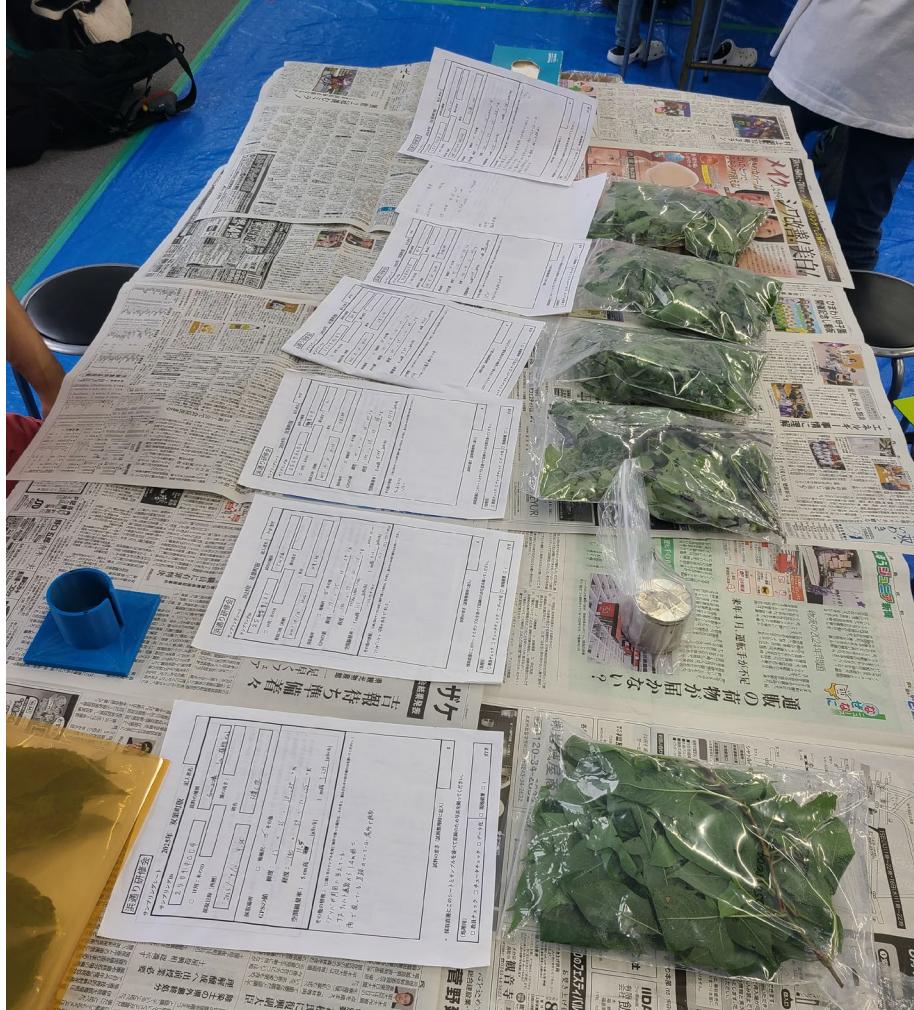
- ・5cm土壌
ミゾソバと同じ場所
→土壌と植物に含まれる放射性物質
の量の関連性を調査

- ・30cmライナー
深さによって放射能濃度が
どのように変化するか

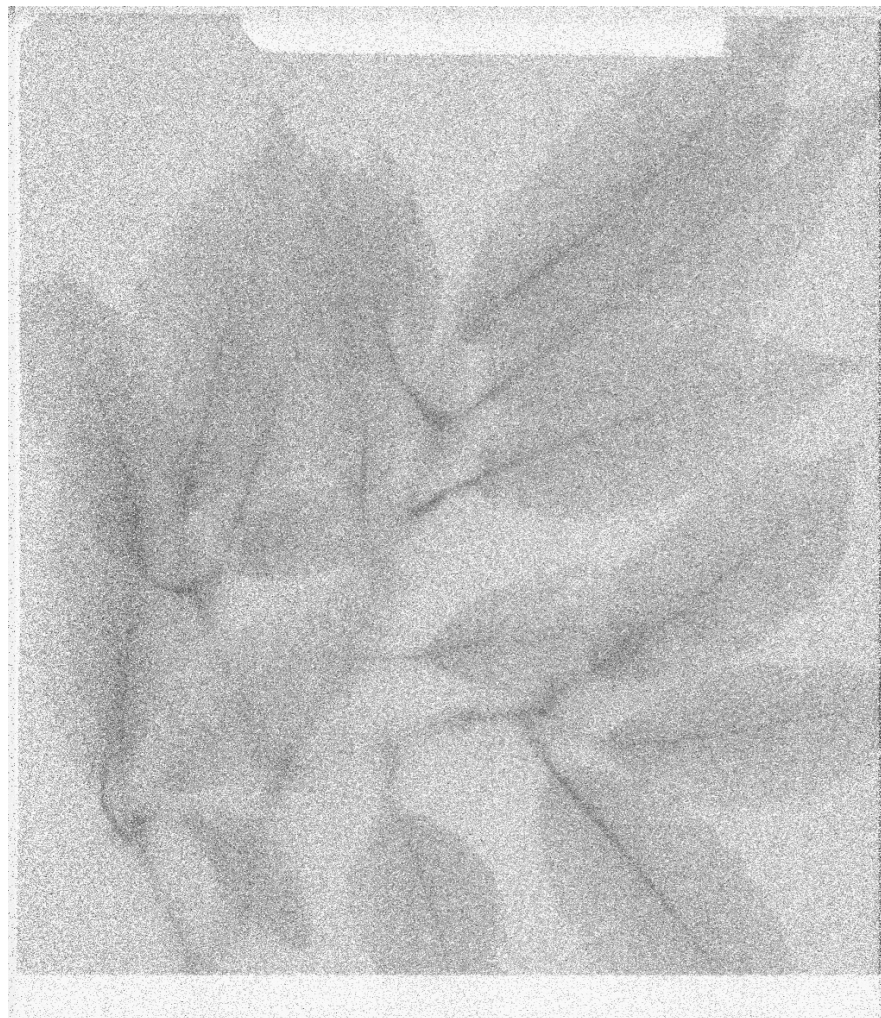


大阪大学
THE UNIVERSITY OF OSAKA

試料整理



浜通り環境放射線研修会 2025年9月双葉(山田)で採取したコナラを、 福島拠点のIP読み取り装置で撮影した画像



250909 10:27 サンプル採取

250910 サンプル処理
18:50~曝写

250911 14:50 撮影

SampleID 2509FC01
標準木ID FY03
木の高さ 5m

GPS 37°25,37.61"N
140°59,13.56"E

空間線量 5cm 4.878 μ Sv/h
1m 5.505 μ Sv/h

生重量 12.55g



大阪大学
THE UNIVERSITY OF OSAKA

測定(5cm土壌+植物)

ゲート付近ミゾソバ
 $265.5 \pm 247.4 \text{ Bq/kg}$

5cmとセットのミゾソバ
 $-139.5 \pm 109.7 \text{ Bq/kg}$
鉛遮蔽あり
 $3.3 \pm 0.0 \text{ Bq/kg}$

5cm土壌
 $47822.9 \pm 257.2 \text{ Bq/kg}$

5cm土壌
 $47822.9 \pm 257.2 \text{ Bq/kg}$

※一般食品における
放射性物質の基準値

100 Bq/kg

考察

ミゾソバからはほとんど放射能が検出されなかった

→あまり放射性物質を吸収しない？

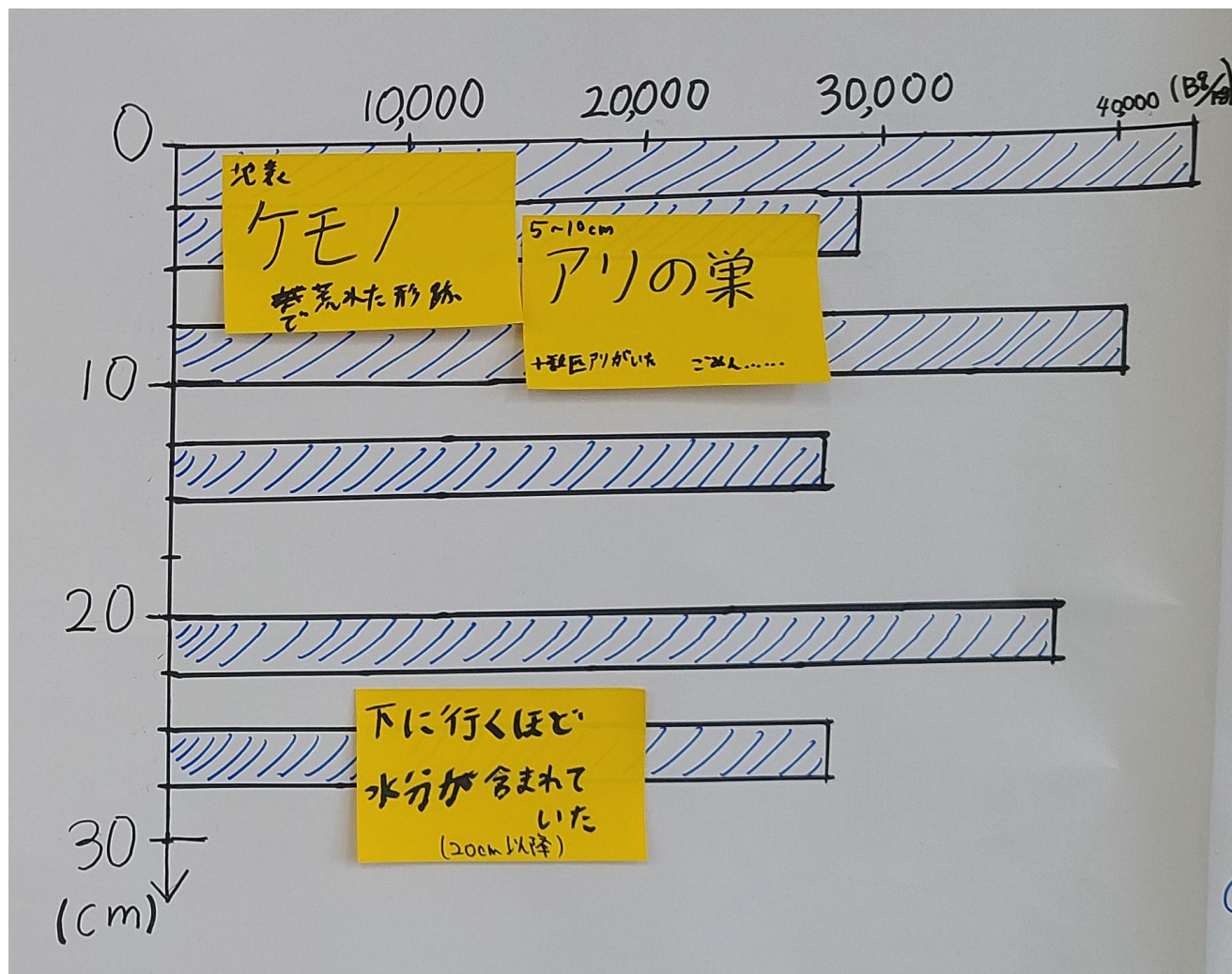
IPの結果を見て

植物種は違うが、茎の部分に多くたまっている。
→サンプル整理の際に、茎を除いてしまったのが原因？



大阪大学
THE UNIVERSITY OF OSAKA

測定(ライナー)



結果

- 深さが増しても放射能濃度が減らなかった

考察

- 獣により土壌が攪拌
- アリが地表付近の放射性物質を運搬
- 地下に帯水層があり汚染水が貯まっている



中間貯蔵施設見学

- ・班員の印象・気づいたこと

- 広い公園みたいで中間貯蔵施設だといわれなければわからない

- 放射線濃度が帰還困難区域内で特別高いわけではない

- ・考えたこと

- 放射性濃度が高い土を福島県外に移す意義とは

- 中間貯蔵が終わった後、現在中間貯蔵施設として利用されている土地をどのように活用するか



1F見学①

○班員の印象・気づいたこと

- ・知識から体験へ

- 海からの距離、廃炉作業員の様子

- ・東電社員さんと話して分かったこと

- 風評被害について、廃炉にかかる時間と費用の問題

- ・放射能濃度測定器を持っているからわかること

- 思ったよりも放射線濃度は高くない、でも建屋前は高い



大阪大学
THE UNIVERSITY OF OSAKA

1F見学②

○考えたこと

- ・立地の問題

→敷地が双葉町と大熊町の両方に面している、海に面している

- ・廃炉について

→ALPS処理水の問題、廃炉にかかる時間の問題



大阪大学
THE UNIVERSITY OF OSAKA

町並み

- ・津波の跡が分かりやすい
- ・解体中の建物が残る
- ・中間貯蔵施設、モニタリングポストが存在する
 - 津波被害、町の復興度合いのイメージの具現化

||

実際に町を目にすることで、具体的な姿を知ることができた

交流会

- ・地元民と移住民の間の軋轢
- ・復興の終わりとは
- ・町に戻ってきた人、戻ってこなかった人
→『復興』とは何か？

||

地元住民と話すことで復興の難しさを実感した

福島県の過去

- ・双葉町 約7000人 大熊町 約12000人〔2010年 国勢調査より〕
- ・学校の生徒数も多く、子供が多い町であった
→東電の影響もあり、双葉・大熊は町全体として潤っていた

現在

- ・双葉町 約180人 大熊町 約900人〔2020年 国勢調査より〕
- 2010年と比較して 双葉 約2.8% 大熊 約7.5%
震災から約14年たった今でも町には津波の被害の跡が見られた。

未来

復興の終わりとは

「戻りたい」と
考える住民が
再び町に住める
ようになった

元の町の活気

「被災地域」と
しての認識・
意識の風化

一方で

人々の心を癒す行為自体が『復興』
→復興に終わりはないという考え

感想

- 試料採取を通じて放射線に関する数値が身近なものになった
- 復興は一筋縄ではいかない。本当に今やっていることがよいことなのか、常に内省的である必要があるなと感じた。
- 実際に街に行き、人々の声を聞かないと分からないことがあると感じられた
 - ・ 目に見えないものに対する復興について考えるのが難しいと感じた。